

山梨県ゐのはな同窓会支部

横山 宏

「山梨県ゐのはな同窓会支部」のあゆみ

— 昭和26年から平成21年までの概要 —

私は昭和26年3月母校附属病院で1年間のインターン（実地修練）を終了し、同年5月上旬施行された第10回医師国家試験（学内大学会館で2.5日間）を受験し、合格の手応えがあったので、その2日後には荷物をまとめ6年間にわたる千葉での生活に幕を閉じて、故郷山梨県の自宅に戻った。甲府に帰って翌朝から山梨医学研究所（所長 田宮猛先生）附属県病院に見学生として出勤した。そこには、小児科部長として岩沢敬先生（昭和15年卒、元千葉大医学専門部教授）、細菌検査科長として本田玄四郎先生（昭和30年卒、元千葉大細菌学助教授）のお二人が母校より赴任されていたからである。また第一内科医員として八巻幸悟先生（昭和20年医学専門部卒）もおられ、これら偉大な先輩のご指導を受けながら、岩沢先生の下で小児保健医療の研鑽に励んだ。岩沢先生の前任部長の高津忠夫先生が信州大学小児科教授にご栄転になり、その下に医員としておられた小林恒雄先生が高津先生とともに信州大学に転勤され、小児科医師1名欠員となっていたので、昭和26年12月27日付けで小生は山梨県職員として正式に採用して頂けることになり、その後42年間この病院（後に山梨県立中央病院と改称）に勤務することになるのである。

岩沢先生からは、小児科診療について学生時代から引き続いてご懇切なご指導を頂くことができ大変有難かったし、本田先生にも感染症の検査や診断のことで実地指導をして頂いたこと等、大学の医局に残って研修を続けたよりも恵まれた充実した毎日を送ることが出来たと感謝している。

さて「山梨県ゐのはな同窓会支部」が以前どのようなであったのかは小生より先輩が既におられない現在では、昭和26年以前の状況は明らかではないが、その当時は本田先生が「ゐのはな同窓会山梨県支部」の運営については大変ご熱心で、開催日の設定や通知などは全て引き受けておられ、小生も微力ながらお手伝いしたのを覚えている。

当時も1年に1回開催されており、場所は湯村の昇仙閣で小生の記憶によれば、天野富馨先生（昭和10年卒）が会長（支部長）を務めておられて毎回20名位の同窓生が出席されていた。小生も岩沢先生に連れられて出席し、最年少なのでいろいろと教えて頂くことも多く、可愛いがって頂いた。それぞれ千葉での学生時代の思い出に花を咲かせて、お互いに1年に1回の会合に楽しい一時を過ごした。とくに今でも脳裏に蘇ってくるのは、小林清丸先生（現在の清房先生のお父上）の舞台での格調高い仕舞いのお姿である。

当時（昭和30年、1955年頃）「山梨県支部総会」にしばしば出席されていた会員のお名前を思いつく

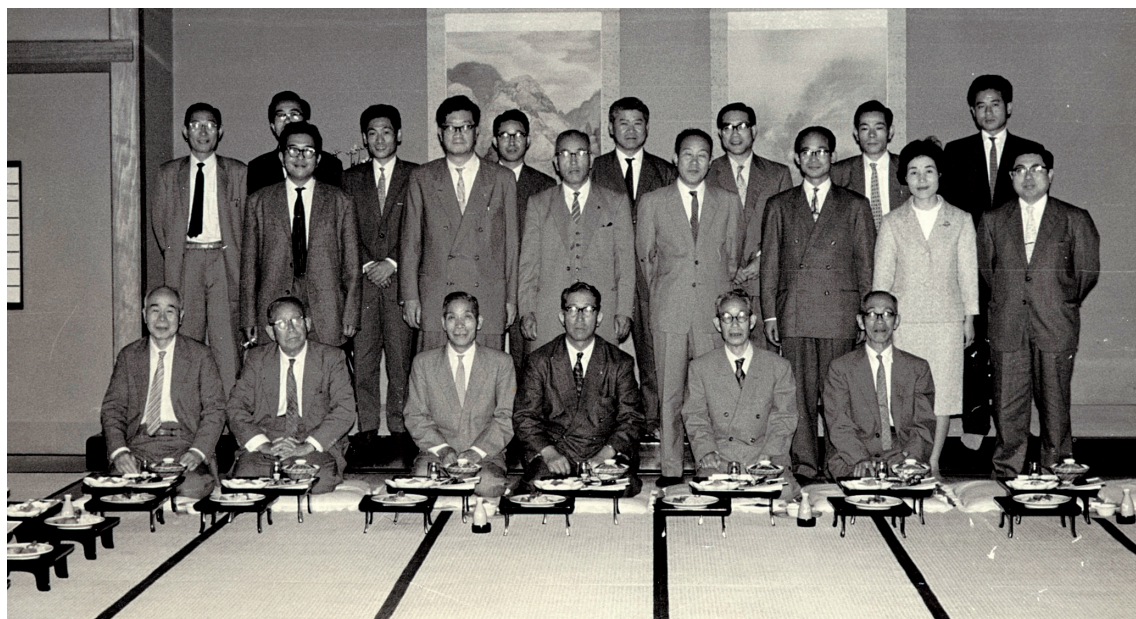


写真1. 昭和30年頃の山梨県ゐのはな会

まにまに揭げてみると（敬称略）：渡辺 篤（大6）中田用（同）小林清丸（大11）清水英政（昭6）小宮山一男（昭9）倉本統一（昭9）天野富馨（昭10）本田玄四郎（昭10）小川象一（昭12）守屋弘（昭13）折居正一（昭13）岩沢敬（昭15）水嶋和朗（昭16）齊木林之介（昭17専）八巻幸武（同）佐々木芳岡（昭19専）八巻幸悟（昭20専）松岡伊津夫（昭24専）吉田義朗（昭24）原山嘉彦（昭24専）津田康之（昭25専）横山宏（同）跡部勝朗（同）小林清房（昭27）近藤茂（昭27専）大久保昭人（同）土屋和子（同）保坂達（同）壬生倉勝（同）溝部孝二（同）池谷清一（同）山下泰徳（昭28）永瀬敏行（昭29）の各位であった。（写真1）

千葉医科大学は昭和29年まで、医学専門部は昭和27年までの卒業生で終わり、昭和30年からは千葉大学医学部の卒業生になったようであり「山梨県ゐのはな同窓会支部」にも医学部卒業生が入会されるようになり、また次々に下記の方々が山梨に帰郷されたり、転勤等で山梨県に來られて入会されたので会員の若返り時代を迎えた。

赤星至朗（昭34）山角博（昭36）三井静（昭38）清水天（昭39）山口正敏（同）飯田龍一（昭41）藤原克己（昭43）花輪孝雄（昭45）中沢肇（昭52）古屋好美（昭53）鶴田好孝（昭54）平賀幸弘（昭55）深沢敏男（昭57）大沢一仁（同）細田和彦（昭58）佐野三千広（昭60）

支部長は天野富馨先生（精神科）から佐々木芳岡先生（眼科）に交代し、会務は清水天先生（永政先生次男、耳鼻咽喉科、県立中央病院勤務から後に開業）がご多忙の中をよく面倒みてくださった。佐々木芳岡会長は甲府市医師会会長を6年間もお務めになり、また山梨県眼科医会会長のほか日本眼科医会監事にも就任され、また山梨県公安委員（委員長）となられるなど、「山梨県ゐのはな会」としても大変な名誉であった。

昭和53年に山梨医科大学は開学し、55年から第1期生が入学、附属病院は58年より開院した。それに伴って、千葉大卒の教職者も山梨に赴任され「山梨ゐのはな同窓会」も会員が増え、とくに、塚原重雄先生には後に副学長にもなられた。

このようにして本会も賑わいを増し、会員は約40名に達したが、他県に比較すれば少数であろう。しかし、常に35%前後が出席されたのは大変喜ばしいことである。なお、開業医と勤務医の会員に占める比率はほぼ同率である。山梨大学医学部（山梨医科大学）関係の会員は次の諸先生方である。

塚原重雄（昭36）熱海佐保子（昭39信大、解剖）会田薫（昭56）相原正雄（同）松江弘之（昭62）市川智章（昭63）大西洋（同）中尾篤人（平1）松田兼一（同）野口佐綾香（平15）

その頃、清水天先生が医師会の要職に就任され、多忙となられたこと（後に甲府市医師会長就任2期）から、平成13年7月の総会より事務局を中沢肇先生と相原正男先生が担当してくださることになり、その後は母校から教授をお迎えして最近の状況をお聞きするとか、会合を写真撮影し、機関紙「ゐのはな同窓会報」に送り、山梨県支部の様子を掲載してもらうなどにより、支部の活性化は一段と向上し、現在も続くそのご労苦に対して山梨県支部会員一同深く感謝している。なお、清水天先生は山梨県における小児救急医療システム確立の功績により平成19年11月に日本医師会長より特別有功賞を授与されている。

また、溝部孝二先生は平成8年4月から平成14年3月まで3期6年間山梨県医師会会長の要職につかれ、山梨県医療の向上、発展に尽力され、そのご功績により叙勲の榮譽に浴されている。今は亡き先輩を含め当会の会員は、それぞれの地域や、それぞれの専門分野においてリーダー的な存在として活躍されておられることは「ゐのはな同窓会」の誇りであると思う。

その後、佐々木芳岡会長（支部長）がご高齢でもあり、体調をくずされたこともあって、平成15年7月の総会から小生が後を引き継ぐようにとのご指名を頂き、不適任とは思いつながらも暫くの間、不肖横山が会長職を務めさせて頂くことになり、山角博先生（山角病院理事長）が副会長に選任された。

当時、首都圏ゐのはな支部連合会（仮称）結成の話題が本部から伝わり、山梨県支部長に就任早々、平成15年9月27日に出席（お茶の水賓館）し、東京、千葉、神奈川、埼玉、茨城、栃木、群馬、静岡、の各県代表とゐのはな同窓会活性化について語り合った。

翌年の16年9月18日には横浜市で第2回目の首都圏ゐのはな連合会が開催されたので出席し、各県の支部長先生方と懇意にして頂き、「山梨ゐのはな会」の状況をも報告する機会が得られた。平成17年1月28日には宇都宮で開催された「栃木県ゐのはな会総会」にご招待を頂いたので出席し、母校本部や近隣諸県のゐのはな会役員と懇談させて頂き友好関係を広めることができた。その後は、埼玉、群馬、東京等の各ゐのはな会総会にご招待を頂き、相互の親睦を深めるために努めて出席させて頂いたが、そ

第4章 同窓の発展

それぞれの開催地の会長先生はじめ役員の皆様方には大変お世話になり、改めて賜ったご厚意、ご歓待に心から感謝の意を表したい。

また、母校の学部長先生はじめ現任教授の先生方から学術研究成果など、医学の進歩のほか研修医制度その他、大学が抱える諸課題や今後の抱負等をも拝聴し、新知識が得られたことも有意義であった。

平成17年7月には同窓会本部から渡辺武会長先生を山梨県支部総会にお迎えし、母校の近況など何うとともに老朽化した同窓会館建て直し等創立135周年の記念事業計画についても拝聴した。

この年に本部から役員推薦を依頼されたので、同窓会本部の常任理事には赤星至朗先生、理事には花輪孝雄、山口正敏、中沢肇の各先生方を推薦し、渡辺武同窓会長の下で会務に当たって頂くことになった。

平成18年の本会では、とくに本部からのご招待はしないで、支部長の小生から近県諸支部の様子、唐沢祥人先生（昭43）の日本医師会長への立候補についての応援と創立135周年を迎えての記念事業としての仮称「ゐのはな会館」建設、現・記念講堂の改修などに要する費用の募金活動などを主な話題として論議した。

平成19年6月の本会では大学院医学研究院分化制御学（免疫学）教授の徳久剛史教授をお招きして母校の近況や135周年記念事業等について拝聴した後、楽しい懇談の一時を過ごした。

平成20年には、以前から“ゐのはな同窓会広報担当理事”の鈴木信夫教授からご依頼のあった「ゐのはな同窓会報」に掲載中の“駅前ミーティング”に山梨県支部でも対応させて頂くことにし、平成20年2月8日に双方の準備が整ったので午後6時30分から約2時間、甲府市内のホテルの一室で懇談会を開催した。大学本部側からは鈴木信夫教授と広報連絡係の高木賢司氏とが見えられ、山梨県支部側は小生と赤星、塚田、三井、清水、飯田、中沢の7名の会員が出席し「山梨地域の医療情勢について」それぞれの立場から報告し、「ゐのはな同窓会」として問題点を論議し合った。この会合の内容は、「ゐのはな同窓会報」148号、149号、150号の3回にわたり連載されている。会話から文字（文章）にされたことで鈴木先生と高木氏には、大変なお仕事ではなかったかと、そのご苦勞に敬意と謝意とを表したい。

平成20年6月に山梨県支部総会が開催され、小生から近県各支部総会に出席した時の状況の報告と2月に当地で行われた「駅前ミーティング」について報告した。また、常任理事の赤星先生からは同窓会総会、常任理事会の内容について報告があった。

また、今回は役員改選を行い、会長（支部長）は小生から山角博先生へ、副会長は山角先生から塚原重雄先生へと交代し、常任理事には赤星先生から三井静先生に交代、理事2名は花輪孝雄、山口正敏両先生の留任と決定し、小生はやっと支部長を退任させて頂きほっとした。その後は幹事の中沢肇先生



写真2.平成21年5月 山梨県ゐのはな会

から会務・会計報告があり，出席会員からそれぞれ近況報告や懐かしい思い出話などあって和やかな楽しい一時を過ごした。

平成21年5月，恒例の「山梨県ゐのはな会総会」が開催され，今回は千葉大学第一内科から東京大学に招聘され，永年東大消化器内科教授としてわが国の消化器内科（とくに肝・胆管系）の権威として世界的にも有名な小俣政男先生（昭45）の歓迎会を兼ねて開催された。小俣先生は21年3月に東大を退官され今回，山梨県立病院（中央病院，北病院）の独立法人化が予定されるなかで理事長として就任（現在は山梨県特別顧問）されることになり，山梨に帰郷されたのである。「山梨県ゐのはな会」としては，強力な会員をお迎えして大いに活気づくことが期待される。

今回は，山角博新会長の叙勲の祝賀もかねて行われた（なお，当会で最近叙勲の栄誉を受けられたのは山角会長の他，佐々木芳岡，溝部孝二，赤星至

朗，横山宏の4会員であったろうか）（写真2）

山梨県の「ゐのはな同窓会支部」は多少の変動はあるものの，約40名の会員数で，他県に比較すると極めて小数であるが，出席率は平均30～50％であり，多数の会員を擁する他県に比較すれば良好といえるのではないだろうか。医大（医学部）が設置されてからは会員の若返りが進み活気も溢れてきたように思われ喜ばしい限りである。今後は会報を発刊するなどして更に山梨の良さをも知って頂き，卒業生が一人でも多く山梨に定着されることを祈るとともに，大学本部や他県の「ゐのはな同窓会」とも一層連携を密にし，広く会員の親睦を図るとともに母校の発展に微力ではあるが寄与しながら山梨県の医療レベルをも向上させたいと願うものである。

母校創立135周年を祝うとともに「千葉大医学部」と「ゐのはな同窓会」の今後益々の隆盛を心からお祈りして擱筆する。

（よこやま ひろし）